

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

ともかの誘いでなつみは「ショッピングセンターはるぞの」へ、母に内緒で、ちずるやよしみと出かけていた。ともかはいつもリタちゃんグッズをたくさん買い、最後にはアイスクリームまでおごってくれる。この場面は、他の二人は母からつきあいを禁止されたが、なつみは誘いを断れず「はるぞの」へと出かけて行く場面である。

放課後こうして会うともかちゃんと、学校のともかちゃんとはどこか感じがちがっていた。学校では、ともかちゃんはだれともあまりしゃべらなかつた。授業のときはまっすぐ前をむいて先生の話をよく聞き、先生にあてられると、しずかな声ではつきりと答えた。答えはたいいあつていた。絵もじょうずだった。みんなで城山にスケッチに行ったときには、天守閣を描く子が多くなかで、城山から見える町のようにすまかく描いて先生にほめられた。それから、ともかちゃんはずっと飼育係をしていた。四年生になったばかりのとき、手をあげて自分からうさぎの飼育係になったのだ。一学期も二学期も、三学期になっても、ともかちゃんは飼育係をつづけていた。毎日ひとりうさぎ小屋のそうじをしていた。それはなかなかできることじゃないと、なつみは思う。はるぞのでまわっていたのは、ともかちゃんだけだった。

さそいのにって来たのがなつみだけだということを、ともかちゃんは気にしていないようすで、「行こ」とエスカレーターに乗った。

リタちゃんのコーナーに行き、ともかちゃんはいつものように、一つ一つのグッズを見て歩いた。

「なつみちゃん、リタちゃんのハンカチ、もってる？」ともかちゃんはきいた。

「もってない」となつみは答えた。

「買ってあげる」とともかちゃんは言った。

ともかちゃんは惜しげもなく選びだすと、なつみに渡した。

いいのかなと思いつながら、ありがとうと受け取り、「ね、どうして、そんなにおごづかいがあるの？」

となつみはきいた。

「夜、お父さんがくれるの。お酒を飲んで、酔っぱらうと、きまつてポケットからお金を出すの。そして、おねえちゃんとわたしに、お札をひらひらと投げてくれるの。それがお父さんのくせ」

(3) ともかちゃんは下をむいて、かすかに笑った。

「あ、いいもの、見せようか？ 宝物」とともかちゃんは言った。

ともかちゃんは机の引き出しをあげると、小さな箱を取り出した。

「ほら」と、箱のふたを取ると、なつみに中のものを見せた。白い石のようなものがごろつと二つ入っていた。

「なに？」

「ベルの骨。かっていた犬。去年死んだの。ベルはいつもわたしといっしょに寝てたんだ。わたしが学校から帰るのをずっとまわっていて、わたしを見ると、くるくるまわってよるこんでた」

ともかちゃんは白い骨を手のひらにのせた。

「こうやって見ていると、ベルは死んでも遠くへ行っていない気がする」

ともかちゃんは骨をそつと手で、それから箱にもどした。

そのあと、ふたりはリタちゃんのトランプで神経衰弱を二回した。

五時になったので「帰る」となつみが言うと、ともかちゃんは「送っていく」と立ちあがった。

下におりると、下のへやは真つ暗だった。広い家に、ふたりの足音がひびいた。「近道、おしえてあげる」とともかちゃんは言い、とちゅうの道をおれて、せまい路地へと入っていった。くねくねと道をまがって、それからふいに公園に出た。すべり台があつて、砂場があつた。見おぼえのある児童公園だった。そこからな

「いい、いい、そんな」となつみは言う。

「いいって、いいって。買ってあげるって」

ともかちゃんはどれがいいかなあと、ハンカチを広げた。どのハンカチにもリタちゃんが笑っていた。ともかちゃんはハンカチを自分で選んでなつみにプレゼントしてくれた。「ないしょよ」と、包みをわたすときに、ともかちゃんも言った。ともかちゃんは自分のためには、リタちゃんの絵が大きく描かれたファイルを買った。

「うちに、来る？」

(1) アイスクリームを食べながら、ともかちゃんがさそつた。

「いいけど」

そう答えながら、ちずるちゃんとよしみちゃんが「先生に話す」と言っていたことを思い出していた。なつみは落ち着かない気もちになった。

(2) ともかちゃんの家は白い壁にピンク色の屋根がとがっていて、周囲の家のなかで、ひととき目立っていた。ともかちゃんは玄関のかぎをあげて、なつみを家に入れた。家にはだれもいないようだった。広いうかをとおつて階段を上がり、白いドアをあけると、そこはともかちゃんのへやだった。

へやのなかにはリタちゃんであふれていた。大きいリタちゃんのぬいぐるみがあり、クッションやマット、小物入れやテーブルクロスも、すべてリタちゃんだった。

「すごいね」となつみは言った。

「そうかなあ」とともかちゃんは言った。「あげようか？ リタちゃんの鉛筆」

「いいよ」となつみは答える。

「いいよ、あげる。下じきは？ 消しゴムもいっぱいあるよ。あげようか」

ともかちゃんは引き出しをあげ、鉛筆や消しゴムを出した。一度も使っていないものばかりだった。

「あげるよ、鉛筆と消しゴムでしょ。ノートも」

つみの家はすぐだった。

「じゃあね」となつみが自転車をこぎだそうすると、「お花見しよう」とともかちゃんが言った。

「え？」

「この木、桜よ」と、ともかちゃんはそばの木を指さした。

「いつ咲くの？」

「四月五日に咲く。わたしのたんじょう日。わたし、桜が満開のときに生まれたんだって」

葉もない、はだかの桜の木はまるで枯れているみたいに見えた。

「さよなら」と、暗がりのなかでともかちゃんは言った。

そのあと、ともかちゃんからさそいの電話はかからなかつた。

その後ともかとはだれも口をきかなくなり、なつみもはなれてしまう。ある日ともかは、リタちゃんグッズをなつみの家の玄関の前に置いて転校していった。ともかの父の会社が倒産したかららしい。次の場面は、四月五日になつみが児童公園を訪れる場面であるが、なつみはともかが来るかどうかわからないと思っていた。

「なつみちゃん」と声がした。

ともかちゃんだった。ともかちゃんは自転車に乗ってきていた。背中にリュックを背負い、はあはあらしい息をしていた。

「やつぱり満開だった」

ともかちゃんは自転車をとめると、にっと笑った。

「お花見、しよう」

ともかちゃんはリュックをおろすと、なかからシートをとり出した。(4) 水色のシ

「ト」だった。それを桜の木の下にしいた。

なつみはくつをぬいでシートの上にあがった。下から見ると桜もきれいだった。

ともかちゃんはリュックの中から水筒とおべんとう箱を出した。

「きれいだねえ」と、ともかちゃんは花を見あげて言った。

ふたりはおべんとうを食べた。

食べおえてから、なつみはたんじょう日のプレゼントをともかちゃんにわたした。いつか買ったグリーンティングカードもそれにそえた。

ともかちゃんは下じきを見ると、「わるいですねえ」と言った。それから「はるぞの袋、なつかしい」と言った。

「はるぞの、もう行ってないの？」となつみはきいた。

「行ってない」

「ふうん。リタちゃんは？ もう集めないの？」

「リタちゃん？」

ともかちゃんは小さくため息をついた。

「リタちゃんかあ」

もう一度、ともかちゃんは言った。「あーあ」

その声はおばあさんの声のようだった。

「雲みたいだったんだよねえ、リタちゃんて。むくむく、むくむくわいて、雲みたいだった」

「うん」となつみは言った。ピンク色の雲がへやいっぱい広がっている感じ。

「どんどん、どんどんふえてくるの。どんどん、どんどん。それから」

⑥ 言いかけて、ともかちゃんは口をつぐんだ。ともかちゃんは地面をじつとにらんでいた。地面には桜の花びらがいっぱい散っていた。

「穴」

ぼつりと、ともかちゃんは言った。

「なにっ」

「うん」

空は青くすんでいた。空をじつと見ていると、ふと、もう何十年も生きていたような気がした。何十年もお花見をしてきたような気がした。

桜の花びらは、はらはらと散っていた。

ふたりはくつをはくと、花びらを口で受けとめようと、口を大きくあけて、花

びらを追いかけはじめた。なかなか口には入らなかった。

花びらがともかちゃんのまぶたにくっついた。

「花」となつみは言った。おかしさがこみあげてきた。

なつみが笑うと、ともかちゃんも笑った。「頭に」と、ともかちゃんはなつみ

の頭を指さしながら笑っていた。

はしりながら笑っていると、春がどんどんふくらんでいく気がした。

⑨ いつまでもいつまでも、桜が咲いているといいのに、となつみは思った。

飛行機雲は遠くで、まるでなにかの合図のように、かがやいていた。
(岩瀬 成子「春、ともかちゃんと」より)

問一 — 線(1)「いいけど」ということばは、なつみのどんな気持ちを表していますか。
[]に入る十五字以内のことばを自分で考えて答えなさい。

なつみの

気持ち

問二 — 線(2)より前の部分で、なつみはともかをどう思っていますか。次の中から最も適切なものを選び、記号で答えなさい。

- ア ともかはリタちゃんグッズやアイスクリームをいつもくれるのでとても良いお友達だ。
- イ ちずるやよしみが自分の都合のよいときだけつきあうので、ともか

「このまえ。うちの近くのスーパーのリタちゃん売り場に行ったの。そいで三十分間立ってたんだ。ほしくなるかどうか、ためしたの。リタちゃんのをいろいろ見たよ。わたしのもってないボールペンやティッシュケースがあった。買いたいので、自分にきいた」

「ふうん」

「そのときね、きゆうに黒い穴が見えたの。リタちゃん売り場のそこだけ黒い穴があいてたの。穴はさいしよはぼつんと、鉛筆の先であけた穴くらいに小さかったんだけど、見ていると、ソフトボールくらいの大きさになって、それからバスケットボールくらいの大きさになった。その暗い穴を見てたら、すいこまれそうになった。なかはまっ暗。こわかったよ。すいこまれたら、きつともう二度と出てこられないんだよ」

「深い？」

「たぶん。どこまでもつづいている感じで、夜よりもっと暗かった」

ともかちゃんは言葉を切ると、なつみを見た。「信じる？」

「うん」となつみは言った。黒い穴を思いうかべた。夜よりも暗い場所がぼっかり見えたのだ。それはおそろしいと思った。

ともかちゃんも一度ため息をついた。そして桜の花を見あげた。⑦

「あんはまるで、どこか遠いところへ行ってきた人のようだとなつみは思った。ともかちゃんは、ひとりであるんなことを考えたんだ。それはとても苦しいことだったのかもしれない。

「見て」と、ともかちゃんが空を指さした。

見ると、南の空にみじかい飛行機雲がかかっていた。

「見えないけど、空には昼間でも星がいっぱいあるんだよ」とともかちゃんは言った。

「うん」

⑧ 見えないけどあるって安心だね」

は不愉快だろう。

ウ 学校ではだれともあまり話さないのに、外でみんなとよくおしゃべりをするので、信用ができない。

エ 学校と外とはともかは感じが違うが、学校での真面目なともかが本来の姿ではないか。

問三 — 線(2)「ともかちゃんの家は白い壁にピンク色の屋根がとがっている」から始まるともかの家の様子から、どのようなことがわかりますか。次のア

〜オについて正しいものには○を、そうでないものには×をそれぞれ

れ答えなさい。

ア お父さんもおねえちゃんもともかも、この何の不自由もない生活を楽しくしている。

イ お父さんはいつも気前がよく、ともかはそんなお父さんを自慢に思っている。

ウ ともかは死んだベルの骨を宝物と思うほど、ベルを心の支えにしている。

エ ともかは立派な家に住んでいるのに、ひとりぼっちでいることが多い。

オ ともかは部屋にあるリタちゃんグッズを友達にあげることを最大の楽しみにしている。

問四 — 線(3)「ともかちゃんは下をむいて、かすかに笑った」とありますが、ここにはともかのどのような気持ちが表れていますか。答えなさい。

問五 — 線(4)「水色のシート」とはどのようなことを表していると思われるか。次の中から最も適切なものを選び、記号で答えなさい。

- ア 青空をイメージするシートを選び、桜の花をより美しく映えさせる、ともかのセンスの良さ
- イ リタちゃんのシートを選ばないことで示そうとした、ともかのなつ

みへの友情

ウ リタちゃんへの強いこだわりもなくなり、すっきりとしたともかの心

エ 相変わらずなつみを強く意識し、シートを選ぶにも少しでもなつみに良い印象を与えようとするともかの気持ち

問六 一線(5)「むくむく、むくむくわいて、雲みたいだった」と思ったともかの説明としてあてはまらないものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア リタちゃん部屋がいつぱいになるとお姫さまになったようで、この上なく幸せな気持ちになった。

イ リタちゃんグズに囲まれていると雲の中のように現実を忘れられた。

ウ リタちゃんグズは雲が空を隠してしまうように大切なものを隠してしまった。

エ リタちゃんグズを限りなくほしくなる気持ちが、雲のわく様子に似ていた。

問七 一線(6)「言いかけて、ともかちゃんは口をつぐんだ。ともかちゃんは地面をじつとにらんでいた」とありますが、ここにはともかのどのような気持ちが表れていますか。次の中から最も適切なものを選び、記号で答えなさい。

ア リタちゃんが無限にふえるようすを、これ以上ことばで表現することはできないという気持ち

イ 地面に次々と散る桜の花びらと、リタちゃんのふえてくるようすを重ね合わせて、そこに共通のものを感じて驚く気持ち

ウ ふえ続けたリタちゃんにおおわれた自分の部屋のようすは、はずかしくてとても人には話せないという気持ち

エ ふえるリタちゃんの話の次にくる穴の話の重さを感じ、自分をふる

一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十 二十一 二十二 二十三 二十四 二十五 二十六 二十七 二十八 二十九 三十 三十一 三十二 三十三 三十四 三十五 三十六 三十七 三十八 三十九 四十 四十一 四十二 四十三 四十四 四十五 四十六 四十七 四十八 四十九 五十

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

(1) 村で暮らしている人間にとつては、動物に対する評価は今日でも複雑である。

私が暮らす上野村だけでなく、一九九〇年代に入った頃から作物の動物による被害がほとんどの山村でハゲしくなっている。ジャガイモ、ヤマイモ、大豆が食べられてしまうのはイノシシの仕業で、大豆はサルが食べにくることもある。サルはネギ、シイタケ、果物、ときにカボチャやスイカ、白菜なども狙ってくる。もうひとつ被害の大きい動物にシカがいる。シカは葉のあるものなら何でも食べる。イノシシのいない東北の山村以外では、ほとんどの山村でイノシシ、サル、シカが田畑を荒らして、村人は困りはてるようになった。

このような状況が発生しているのだから、これらの動物は村人にとっては害獣である。しかしこんなジライになってもなお、村人は動物に対して、同じ村に暮らす仲間だという意識ももっている。村という言葉は、伝統的には、人間社会を意味する言葉ではなく、自然と人間の暮らす社会をさしている。とすれば動物もまた村のメンバーであり、共同体の仲間である。

実際村人は、動物をみるタヨウな視線を並存させてきた。ある種の動物は、ある場合では害獣である。しかしその前に村に暮らす仲間で、ところがその動物は冬の猟期には狩猟の対象にもなる。その一方で人間以上の能力をもった生き物として尊敬され、さらに神の世界へのミチスジを知っている霊力をもっている。とあがめられることもある。こういうかたちで語られるときの神とは、自然そのものであり、自然の真理とでもいうべきものであるのだが。

このように述べていくと、人間と動物の関係が矛盾しながら重なり合っていることに気づかれるであろう。仲間だといながら狩猟の対象にもする。尊敬を払いながら、害獣ともみなす。どう考えても、矛盾した関係が並存しているのである。それを人間が人間である限りもたざるを得ない矛盾としてとらえる考え方が、日

い立たせる気持ち

問八 一線(7)「ともかちゃんはまるで、どこか遠いところへ行ってきた人のようだ」について次の問いに答えなさい。

1 なつみはなぜそのように思ったのですか。次の中から最も適切なものを選び、記号で答えなさい。

ア ためいきばかりついているともかはすっかり疲れているように見えたから。

イ ともかのことばに、いろいろな経験をし考えてきた重みを感じたから。

ウ ともかは父の会社が倒産してからいろいろな所を転々とし、なつみの知らない土地を見てきたように思われたから。

エ 恐ろしい黒い穴を見たともかはすっかり性格が変わったように感じられたから。

2 これより前の部分にも、なつみがともかに同じような印象を持ったところがあります。その一文を二十字以内でさがし、その最初の四字を答えなさい。

問九 一線(8)でもかかは星を例にして、「見えないけどあるって安心だね」と言っていますが、ここでともかが感じているのはどのようなことですか。答えなさい。

ア 二人で共にいるこの素晴らしい時間の終わりを示している。

イ なつみの手の届かない世界へ出発するともかの喜びを表している。

ウ いつまでも続くであろう二人の友情を祝福している。

エ これから春に向かう季節のおとずれを告げている。

問十 一線(9)「飛行機雲は遠くで、まるでなにかの合図のように、かがやいていた」とありますが、その説明として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 二人で共にいるこの素晴らしい時間の終わりを示している。

イ なつみの手の届かない世界へ出発するともかの喜びを表している。

ウ いつまでも続くであろう二人の友情を祝福している。

エ これから春に向かう季節のおとずれを告げている。

本の民衆精神にはあつたのではないかと私は思っている。もちろん、生きるために、ときに動物から畑を守り、ときに動物を獲って食べたり皮を得たりすることは許される。なぜ許されるのかといえば、自然の生き物たちもまたそうしているからである。鳥は木や草の実を食べるし、キツネは野ネズミや野ウサギを追う。虫は草や木の葉を食べる。自然がそのような関係になっているなら、自然の一員としての人間にも同じことが許されるはずだ。ところが人間はややこしい問題を背負わされている。それは自然の生命を採取したり、動物と対立したりする理由が、純粋な生命的な行為なのか、それとも自分の「欲」がからだんだん行為のなかを明確にできない、という問題である。たとえば狩猟によって動物を捕獲するとき、それがキツネやタカ、ワシと同じことならそれは「自然の行ない」である。ところが人間は「自然の行ない」としてそうするだけでなく、狩猟によって富を得ようという意識ももつし、ひとつの自己主張、自己表現として狩猟をおこなうというような面をも併せもつ。後者は「自然の行ない」ではなく、「自己」をもつ「人間の行ない」である。「自己」があるから自己目的が生じ、それがときに富の増加をめざさせ、ときに自己主張や自己表現を目的として意識させる。

とするとこのような「人間らしさ」は肯定できるのか。私は「できない」と日本の民衆は考えてきたのではないかと思っている。ここでいう日本の民衆とは、自然とともに、自然のなかで暮らしてきた村の人々のことであり、都市の人々はとりあえずジヨガイして、私はこの言葉を、ここでは、用いている。そうしないと自然とともに生きた人々の精神を明らかにすることができないからである。

それが「自然の行ない」なら肯定できるが、「自然に反する行ない」なら肯定できない。しかしそう考えたとしてもまだ問題は起きる。なぜなら人間には、「自然の行ない」と「自然に反した行ない」との間に、区別しきれない部分があるからである。

(1) 富を蓄積したいと考えたときでも、そのことよって権力を得ようとか、裕福な暮らしがしたいということなら、明確に自然に反するだろう。

(2) 自然の生命たちは、そんなことは考えないからである。ところが将来オトズれるかもしれない苦境に備えるために、多少は富を蓄積しておこうというのならどうなるのか。自然の生き物でも、リスや野ネズミなどは、多少の食料を備蓄するし、蜂は冬を越すために蜜を貯めるのである。とすると多少貯めこむのは生きるための行ないといえなくもない。

(3) それでもなお、人間がおこなう貯えは自然界の生き物のそれとは違っている。ひとつに自然界の生き物は必要量しか蓄積しないが、人間は必要量がわからないから、不安がある限り貯えを増やしつづけることになる。もうひとつは、たとえばリスや野ネズミもかくしておいた木の実などを食べきらずに、そのまま残してしまうことがある。ところがそのことによって木の実が遠くに運ばれ、木にとってはそれがむしろ有効性をもつ。(4) 残すことが無駄になっていなければならず、自然というつながり合う世界から、リスや野ネズミの行為は離れない。それに対して人間の同じような行為は、あくまで自己自身のため、せいぜい家族のための自己目的の行為であり、つながり合う世界が消えているのである。

それならわずかな貯えでもいけないのか。それを否定されてしまったら、生きつづけるという行為自体が人間には成り立たない。

問題はDの両者の境界線がわからないことにある。なぜそうなってしまうのか。それは人間が自己自身の生に対する不安をもっているからであり、そうであるかぎり不安が解消されなければ、自分の課題も終了することがない。不安をおおしてものを考えるから、解消されるまで際限がない。しかも生に対する不安は個人的なものだから、結び合う世界をもちえないのである。

日本においては、自然とともに、自然の近くで暮らしていた人々にとっては、たえず自然の姿がみえているからこそ、自然のままに生きることのできない人間

出し、初めと終わりの五字を答えなさい。(句読点も数えます)

問五 線(2)「自然の行ない」とありますが、それはどういうことですか。答えなさい。

問六 線(3)「ひとつの自己主張、自己表現として狩猟をおこなう」とありますが、それはどのようなことをさしますか。例をあげて答えなさい。

問七 線(4)「人間が自己自身の生に対する不安をもっている」とありますが、筆者はその理由をどう考えていますか。答えなさい。

問八 次のア〜キについて、本文の内容にあてはまるものには○を、そうでないものには×をそれぞれ答えなさい。

ア 「自己のための行ないは許されるべきではないとはいえず、しないですむ人間はだれもいない」という考え方が日本の民衆にはあった。

イ 今日村に暮らす人々の自然に対する意識には、昔ながらの日本の民衆の精神が生きて受け継がれている。

ウ リスや野ネズミが食料を備蓄するのは、木の実を遠くに運び木の分布を広げるためである。

エ 動物とちがつて、人間は生きるのに必要な食料の量が分からなくなるような愚かさを持っている。

オ 村に住む人々は昔から、都市に住む人々が自然のままに生きられないようになって非難し「自然に帰れ」と訴えてきた。

カ かつて村に住む人々は動物とも分けへだてなく共同生活をしてきたが、自己に目覚めるにつれ自然に反する行ないをするようになっていった。

キ 人間が自然のままに生きられないのは、自然の食物連鎖のしくみを知らないからである。

問九 本文には次のような文章が続いています。□に入ることはとして最も適切なものを後のア〜エの中から選び、記号で答えなさい。

の問題もみえていた。しかもなぜ自然のままに生きられないのかは、人間の本性に根ざしている。その本性とは生のなかに「自己」をふくんでいることである。生を自己の生としてとらえ、そこから不安が生まれる。そしてそういう人間のあり方を、愚かにしか生きられない人間のありのままの姿としてみていたのがかつての人々であった。そしてそうであるとするなら、自然は清浄である。なぜなら必要以上に自己を主張することもなく、春になれば花をつけ、秋が深まれば枯れる、ただそれだけの自然の営みを不安をいだくことなく受け入れていくからである。

(内山節『日本人はなぜキツネにだまされなくなったのか』にもとづく)

注 ※1 並存……同時に存在する。

※2 霊力……不思議な力。

※3 精神……心の働き。考え方。

※4 清浄……清くけがれないこと。

問一 線①〜⑥のかたかなを漢字に直しなさい。

問二 (1) (4) に入ることはとして最も適切なものを次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア しかし イ たとえば ウ つまり エ なぜなら

問三 線A〜Dの中で、同じことを言っているのはどれとどれですか。記号で答えなさい。

問四 線(1)「村で暮らしている人間にとつては、動物に対する評価は今日でも複雑である」とありますが、動物に対する評価が複雑だとはどういうことですか。分かりやすく説明している部分を文中から四十字以内でぬき

畑仕事をしていると、石に感謝することがある。特に真夏に種まきなどをする時、晴天つづきで雨不足のときなどは芽がよく育たないときがある。そんなときでも小石の脇に出た芽は結構育つのである。なぜなら石の下は水分があつて、そこに向かって根が伸びるからである。こういう天気るときは、ミミズなども石の下で暮らしていて、石が畑の生き物の世界を守っていたりする。そんなときは石に助けられてもらっているとも感じるし、石もまた□と気づく。

ア 結び合う自然の生命世界の一員だ

イ 植物を助けるためにこそ存在しているのだ

ウ 害獣になることがあるのだ

エ 人間を助けている